日本の伝統仕事着「帆前掛け」を知ろう！

織りの後継者
有限会社エニシング
前川 圭子さん（35歳）

織り職人
芳賀織布工場有限会社
芳賀 正人さん（69歳）

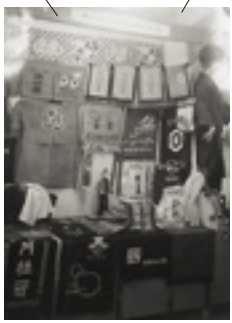
染め職人
完和萬染株式会社
杉江 秀介さん（86歳）

織りの後継者
有限会社エニシング
影山 幸範さん（36歳）

米屋や酒屋などで昔よく目にした、日本伝統の仕事着「帆前掛け」。昭和30年～40年代の最盛期には100軒ほどの製造者がいたといわれるほど、豊橋は帆前掛けの一大産地でした。しかし、機械の自動化や広告宣伝の方法が変化したことなどにより、昭和50年代には一気に衰退しました。その後、「伝統を守りたい」と、東京のアパレル会社が平成26年から市内の織布工場に若手社員を派遣。現在2人が技術を身につけています。

「丈夫で暖かい」と庭仕事やガーデニングの時に使ったり、部屋に壁掛けや暖簾のように飾ったりと、帆前掛けは若い世代にも注目されています。

昭和39年に開かれた
豊橋繊維振興展



戦後全国の酒蔵や醤油屋など、あらゆる業種で会社や店の屋号、社名が入った広告媒体として使われた帆前掛け。最盛期には1日1万枚もの出荷があったそう！

帆前掛け製作の流れ

明治～大正期に発明された
シャトル織機は現役です！

整経〈縦糸〉

830本の糸が絡まらないように、巨大ロールに巻き直す。

管巻き〈横糸〉

横糸を細かい棒に巻き付けてシャトルに入れる。

織り

縦糸と横糸を合わせながら、厚く長持ちする柔らかい生地を織る。

型作り

下絵に基づき手作業で切り抜く。

根気のいる作業です

糊置き

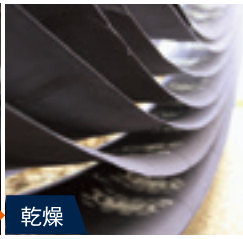
熱湯で煮て柔らかくした生地に型を置き、白くしたい絵柄の部分に糊を置く。

染色

約70℃に熱した溶液に反物を2分ほど浸ける。色むらのないよう素早く上げる。

水洗い

染め上がりを確かめながら生地の両面の糊を洗い落とす。

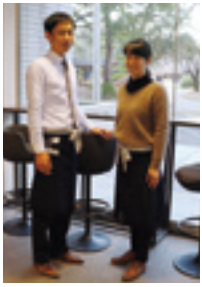


乾燥

日光のもと天日干しする。

市制110周年記念で製作された帆前掛け。手筒花火で豊橋をPR。

おしゃれな帆前掛けができました



女性ならではの視点を取り入れた「花咲く帆前掛け」を豊橋市の女性職員が開発。帆前掛けを2枚つなげて、スリットを入れることで動きやすくしたことが特徴です。市の徽章、ちぎりマークがプリントされたオシャレなデザインです。

販売場所　市役所じょうほうひろば、美術博物館、駒屋ほか
価格　3,780円（税込）